

ともに前へ

156

東京都渋谷区で雑貨な
どの製造卸売会社を経営
する登内芳也さん(47)は、
埼玉県吉川市在住は、
北上市の地域・産業連携
復興支援員として、同市
に単身赴任して地域おこ
しに力を入れている。首
都圏の仲間と共に本県
沿岸の物産販売やイベン
ト支援なども続け、沿岸
部と全国をつなぐ交通の
要衝である北上市を拠点
に「震災前より元氣な東
北」の実現を目指してい

だ。登内さんは北上市芳
町の市本庁舎で市職員と
机を並べ、地域活性化に
向けた取り組みに汗を流
している。

東京で雑貨会社経営 登内芳也さん

北上拠点に沿岸支援

同市の特産品「子さど
いもや桑茶などの販路拡
大、首都圏への地域PR
イベント、ふるさと納税
制度の活用支援など多彩
な事業に関わっている。

■橋渡し役に

震災発生時、登内さん
は吉川市の自宅のテレビ
に映る点滅する日本地図
や津波、原発事故の映像
に居ても立ってもいられ

なかった。
2011年3月30日、
仲間数人と一緒に東北を
支援する非営利型一般社
団法人「チームともだち」
を立ち上げた。何をすべ
きか分からなかったが、
福島、宮城両県と本県の
沿岸部とにかく足を運
んだ。
復興支援イベントの手
伝いや首都圏の支援者
の受け入れなど人、地域
を結ぶ「橋渡し」に励ん
だ。
同年5月、野田村で初
開催された桜祭りでは、
被災者と会話を重ねる中
で「倉庫に残った加工食
品を売りたい」「復興を
手伝ってくれる人が必
要」など現地のニーズを
つかんだ。
以後、三陸の特産品を
販売するホームページの
立ち上げや首都圏の仕事
仲間らに声を掛けてボラ
ンティアを被災地に送る
など、流通業のノウハウ
を生かした支援を続け
た。
「土地勘のない自分が



「震災前より元氣な東北」を目指し、地域おこしに奮
闘する登内芳也さん(右から2人目) 北上市更木

復興支援員 総務
省が支援する制度
で、災害復興特別交付税に
よる財政措置で自治体が採
用している。東日本大震災
の被災者の見守りやケア、
地域おこしを行うコミュニ
ティーの再構築を図るのが
主な目的。任期は1年から

同じ思いで働きたい

北上市農林企画課
八重樫 義正課長補佐(47)

外の視点、新しい感覚でまちづく
りへさまざまなアイデアを提案し
てもらっている。例えば雪など岩手
では当たり前のものも他地域では
珍しく、首都圏などに送ればビジネ
スにつながることを教えてくれた。

登内さんは
自ら積極的
にいろんな
地域に足を
運んで営業
をしており、震災以降は被災地で
多くの支援活動を展開している。そ
の行動力はすごいと思う。震災復興
や地域おこしなど、「地域や産業間
の連携を深めながら活性化を目指
す」という同じ思いで私たちも働
きたい。

被災地に入ったら逆に迷
惑では」と不安に思うこ
ともあったが、登山家野
口健さんが「一人でも多
くの人に現場を見てほし
い」とテレビで訴える声
を聞き吹っ切れた。

■共生目指し
人の輪を広げようと、
仲間らに声を掛けては交代
で被災地をめぐる日々が
続いた。野田村では、小
学生と一緒に「子ども新
聞」を作った。
地道な支援が評価さ
れ、13年7月、北上市の
復興支援員になった。「沿
岸部の商品を流通させる
には内陸の役割が大事。
北上市をハブ(車輪の中
心構造)にすることで東
北を元気にしたい」と展
望する。
震災から4年目に入
り、被災地の状況は日々
変化している。内陸から
の支援活動の在り方も課
題だ。「これからは支援
ではなく、共生が大事。
住民と一緒により良い地
域をつくっていききたい」
と走り続ける。
(北上支局・清水美穂)

いわて 東日本大震災

～被災者からのメッセージ～

▼県医師
岩手医大
よる皮膚科
毎週水曜15
診療所5、
療日のほか
可
▽17日
科、内科系、
▽18日
科、内科系、
皮膚科、小
▼県立
診療 時間
休診 診療
場合もあ
4・32
▽14日